歓迎会挨拶原稿

令和元年 12 月 25 日
金沢大学国際賞選考委員会委員長
柴田正良（金沢大学理事・副学長）

遊佐先生、国際賞の受賞、まことにお目出とうございます。
先生の主著、西田哲学に関する Zen and Philosophy は質量ともに圧巻でした。

実は、私ごとではなはだ恐縮ですが、私の学部時代の卒業論文は、西田幾多郎がテーマでした。当時の指導教員からはウィトゲンシュタインやクワイン、パトナムをテーマに薦められましたが、自分としては、西洋哲学のものまねは嫌だということで、何としても、日本人でオリジナリティのある哲学者を研究したいと思っていました。

しかし、結果は、自分にとって芳しくなく、西田の論文のスタイルが、丁度有名な評論家の小林秀雄の文体のように、「論理性の欠如」のようにしか思われませんでした。小林の場合は、「氷の上をツルツルと歩くような文体」と評されています。

自分はとてつもなく若かったのだと思います。
今にして思えば、例えば、「個体が性質をもつ」のような、西洋形而上学の根底にある、個体と性質の関係とは別の発想、個体が性質「に於いてある」というような「場所の論理」の独自性をもっと積極的に読むべきだったのかなあ、と少し悔やんでおります。

自分のような浅学非才は別として、遊佐先生は早くから西田哲学の真の意味を見抜き、それをわれわれにも分かるように示して頂きました。
同じ哲学の徒として、心からお礼申し上げます。

それでは最後に、先生の今後ますますのご活躍とご健勝を祈念申し上げて、私からの閉会の挨拶とさせて頂きます。
遊佐先生、この度は、まことにお目出とうございました。